医療システム崩壊

ジャワ島地震 AMDA帰国会見「回復が急務」

ジャワ島中部地震の被災者救援に派遣されていた国際医療ボランティアAMDA（本部・岡山市楢津）の医師らが帰国し、十四日、同市内で記者会見した。

活動地のプランバナン地区はジョクジャカルタ市から北東約三十五キロ。周辺の村は大半の家屋が全半壊し、いまだテント生活を強いられる人がほとんど。医師らは、急患優先で通常の診療が受けられないことを指摘し「医療・健康管理システムが崩壊している。その回復が急務」と語った。

帰国したのは、埼玉県越谷市の医師細村幹夫さん(四〇)、北海道室蘭市の看護師、峯岸亜紀子さん(三七)ら四人。地震発生から四日後の五月三十一日に現地入りし、約二週間、巡回診療や予防接種などの活動に当たった。

当初は、ぼうぜん自失の状態だった被災者も少しずつ落ち着きを取り戻してきた。しかし、地震との関連が強いとみられる子どもの食欲不振や、頭痛、体のだるさなどを訴える人は増加しているという。細村さんらは「緊急救援のヤマ場は超えたが、依然、重傷でないため病院でみてもらえないなど、取り残された患者がいる」と支援継続の必要性を訴えた。

AMDAは今回、日本人八人を含む計四十一人を派遣。六月下旬まで巡回診療を継続し、その後は精神的な後遺症を支援するプログラムなど、現地ニーズに合わせた活動を検討している。

（斎藤章一朗）

診療活動する細村医師と峯岸看護師（左奥）＝9日、インドネシア・チュチュアン村で斎藤章一朗撮影